1. 本号刊行の目的と本研究開始までの経過

日清・日露戦争期の地理情報の収集と活用にアプローチする本研究が、近代日本が進めてきたアジア太平洋地域での地図作製や気象観測に関するこれまでの研究をひきつぐものであることは改めていうまでもない。とくに 2017 年に刊行された『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』（大阪大学出版会、平成 27 年度研究成果公開促進費［学術図書］JP15HP5116 による）は、明治初期から日清戦争の開戦までをカバーしており、その成果に基づく本研究では、日清・日露戦争期の地図作製と気象観測について本格的な検討を加えたい。

ところで、『外邦図研究ニューズレター』はこの方面の研究動向や基礎資料の周知にむけて 2003 年以来刊行してきたもので、2014 年までに 11 号を数えることになった。この冊子は書冊だけでなく、PDF ファイルを大阪大学の「外邦図研究プロジェクト」から発信しており、国内の研究者やライブラリアンだけでなく、国外からも参照されている。国立国会図書館のホームページにリサーチ・ナビにみられる「外邦図」だけでなく、ハーバード大学の Research Gide for Japanese Studies でも Historical Maps（歴史地図）のなかに Gaihozu（外邦図）の項目があり、それらを通じて容易に『外邦図研究ニューズレター』のバックナンバーにアクセスできるようになっている。

この背景には、外邦図に対する学術的関心が高まっているだけでなく、とくにアメリカ合衆国の各地の図書館で外邦図が「再発見」され、外邦図の整理を担当するライブラリアンの皆さんからも外邦図に関する情報に関心が寄せられているという事情がある。またそうした方々の寄稿もいただき、本号にもそれを掲載することにしている。

今回 6 年の間隔を置いて『外邦図研究ニューズレター』を刊行するに至ったのは、以上のような内外での関心を継続し、さらに発展させるためには、やはりこの種の媒体の必要性がつよく感じられたからである。現在もなお新資料の発見はつづいており、学会誌になじまない資料目録や画像、調査・研究の報告の周知には、このような媒体の存在価値は大きい。また本誌を通じての情報交換は、日清・日露戦争期の地理情報の収集と活用という本研究の課題へのアプローチにとっても、それがほとんど未着手の領域であるだけに、意義あることになろう。

なお、上記『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』のための研究では、アメリカ議会図書館収蔵の 1880 年代の日本陸軍将校による外邦測量原図をおもに検討したが、それ以降の時期についても、在米の資料の参照は不可欠で、これまでの調査でも日本で見つけることができない日清・日露戦争期の重要資料が、アメリカの図書館にあることが判明していることを付記しておきたい。

くわえて以下では、2014 年以降に展開した研究とその成果を紹介するが、あわせて外邦図デジタルアーカイブにおける外邦図の画像の国立公文書館への寄贈についても概要を報告しておきたい。

2018 年 11 月以降、外邦図デジタルアーカイブの外邦図画像は国立公文書館に設置されたパソコンで閲覧できるようになった。大学以外の公的機関からの外邦図画像の公開にむけて、同アーカイブ関係者はとくに国立公文書館の関係スタッフと検討をつづけ、それがこの閲覧につながることとなったのである。2014 年 1 月 31 日に行った、アジア歴史資料センターでの外邦図デジタルアーカイブの説明（『外邦図研究ニューズレター』11 号 4 頁で概要を紹介）は、このきっかけとなったもので、以後国立公文書館への説明や協議が何度か行われることになった。やや遅きに失するが、ここではそうした協議に至った経過の紹介も含

め、大筋を示しておくこととしたい。

(1) 科学研究費など

平成 24～26 年度の科学研究費補助金（基盤研究[A]、課題番号：24240115）による研究（研究課題名「未利用の海外所在東アジア地理資料の集成と活用」）以降、下記の研究に参加することにより本研究につながる問題意識を持続してきた。

「過去120年間におけるアジアモンスーン変動の解明」（平成 26－30 年度基盤研究[S]、課題番号：26220202、代表者：松本淳首都大学教授）

「日本における近代初期海図の集成と東アジア海域における西洋海図との相互関係」（平成 28-31 年度基盤研究[B]、課題番号：A16H03527a、代表者：鳴海邦匡甲南大学教授）

「地理空間情報を用いた近現代中国の都市・農村社会の実相復元と空間分析」（平成 29-令和 2 年度基盤研究[A]、課題番号：17H01644、代表者：片山剛大阪大学招へい教授）

「江戸時代の日本地図をめぐる国際交流」（2019 年度大阪観光大学ブランディング研究事業、担当者：小林茂大阪観光大学教授［当時］）

(2) 研究活動など

本研究に関連する調査・研究活動は、近世末期以降、第 2 次世界大戦終結までの日本の地理情報収集活動に広くおよんでいる。とくに明治以降は、専門機関の設置とともに地理情報収集の範囲を空間的に拡大するだけでなく、その精度を向上させながら、累積するような形で情報の収集を高度化しており、その展開の把握のためには、多角的な検討が不可欠である。またとくに日露戦争以後になると、西欧諸国の地理情報収集にくわえ、中国大陸では地方レベルでの地図作製も活発化し、日本による地理情報の収集の理解には、海外の諸機関の活動の把握が不可欠である。

このように視野を広げた調査・研究活動について、個々のケースを紹介するよりも、以下ではむしろこの間の研究成果として公表されたもののリストを示し、その広がりを示しておくこととしたい。これには、(1)外邦図に関連するものおよび、(2)気象観測に関連するものと大きく分かれるが、日本周辺における水路測量の初期について検討したところ、近世の日本図の西欧航海者による利用という、従来あまり検討がおよんでいない分野にも研究が展開した。これらは、明治以降の日本の海図作製の理解にとっても意義があり、(3)ヨーロッパにおける近世日本図の利用に関する著作についても示しておくこととしたい。

論文

〈外邦図〉

小林茂・森野友介・角野宏・多田隈健一・小嶋梓・波江彰彦 2014.「台湾桃園台地における灌漑水利の展開と土地利用の変動：GIS を援用した分析」E-Journal GEO（日本地理学会）9(2): 172-193.

Kobayashi, Shigeru 2015. Modern mapping process of East Asian countries: From imperial cartography to national survey. *Japanese Journal of Human Geography* 67(6): 477-479.

Kobayashi, Shigeru 2015. Imperial cartography in East Asia from the late 18th century to the early 20th century: An overview. *Japanese Journal of Human Geography* 67(6): 480-502.

Narumi, Kunitada and Kobayashi, Shigeru 2015. Imperial mapping during the Arrow War: Its process and repercussion on the cartography in China and Japan. *Japanese Journal of Human Geography* 67(6): 503-523.

Koseki, Daiju 2015. Japanese cadastral mapping in an East Asian perspective, 1872-1915. *Japanese Journal of Human Geography* 67(6): 524-540

小林茂 2015.「環境史研究における地図・空中写真資料の評価と活用」*SEEDer*：地域環境情報か

ら考える地球の未来（総合地球環境学研究所）12: 20-29

小林茂 2015.「東南アジアの近代地図整備過程における外邦図」私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『21 世紀海域学の創成：《南洋》から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ』研究報告書（立教大学アジア地域研究所）2: 3-17.

小林茂 2016. 「東アジアの土地調査事業研究へのもう一つの視角 」東アジア土地調査事業研究ニューズレター7: 1-8..

山本一・小林茂 2016.「1943～1945 年アメリカ軍撮影の空中写真によるターゲット・チャート—解説と目録—」東アジア土地調査事業研究ニューズレター7: 27-44.

小林茂・渡辺理絵・鳴海邦匡 2017.「東アジアの土地調査事業研究へのもう一つの視角 」（片山剛編『近代東アジア土地調査事業研究』大阪大学出版会）3-22.（小林 2016.の同タイトルの報告に、大幅に加筆した）

渡辺理絵・小林茂 2017.「20 世紀初頭の清国学生の陸地測量部修技所への留学：地図作製技術の移転の視角から」（片山剛編『近代東アジア土地調査事業研究』大阪大学出版会, 23-51.

小林茂 2019.「外邦図：その由来と可能性」地図中心（日本地図センター）557: 19-17.

〈気象観測データ〉

小林茂 2019.「日中戦争・第 2 次世界大戦期の日本軍の気象観測とデータレスキュー」天気（日本気象学会）66(2): 113-140

〈ヨーロッパにおける日本近世図〉

小林茂・鳴海邦匡 2018.「ヨーロッパにおける長久保赤水の日本図の受容過程」地図（日本地図学会）56(4): 1-17.

Narumi, Kunitada and Kobayashi, Shigeru 2019. The use of Japanese early modern maps by Western cartographers during the nineteenth century. In *Mapping Asia: Cartographic Encounters between East and West*, edited by M. Storms et al, 169-183, Springer International Publishing.

小林茂・鳴海邦匡 2020.「ヨーロッパにおける長久保赤水の日本図」測量（日本測量協会）71(1): 12-15.

小林茂（印刷中）「近世の日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用：近年の成果をふまえた展望」大阪観光大学研究年報 1.

著書

〈外邦図〉

小林茂編 2017.『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 266p.

近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図/小林茂
東アジア地域に関する初期外邦図の編集と刊行/小林茂・岡田郷子・渡辺理絵・鳴海邦匡
19 世紀後半における朝鮮半島の地理情報の収集と花房義質/小林茂・岡田郷子・鳴海邦匡
中国大陸における初期外邦測量の展開と日清戦争/小林茂・渡辺理絵・ 山近久美子
(コラム)『滿州紀行』/小林茂
(コラム)路上測図/小林茂
(コラム)清國二十萬分一圖と英国海図/鳴海邦匡・小林茂
朝鮮半島における初期外邦測量の展開と「朝鮮二十萬分一圖」の作製/渡辺理絵・山近久美子・小林茂
(コラム)「沿道指鍼」・「沿道圖説」・「沿道誌」/小林茂・渡辺理絵
(コラム)日本作製図の国際的利用：ドイツ製東アジア図の検討から/山近久美子・渡辺理絵・小林茂
広開土王碑文を将来した酒匂景信の中国大陸における活動 ： アメリカ議会図書館蔵の手描き外邦図を手がかりに/山近久美子，渡辺理絵，小林茂
アメリカ議会図書館蔵初期外邦測量原図データベースの構築/小林茂，山近久美子，渡辺理絵，鳴海邦匡，山本健太，波江彰彦
(コラム)アメリカ議会図書館蔵初期外邦測量原図データベースの構築と貢献 /山本健太
「アメリカ議会図書館蔵初期外邦測量原図」目録/小林茂，山近久美子，渡辺理絵，鈴木涼子，波江彰彦，鳴海邦匡，小林基，藤山友治
アメリカ議会図書館蔵「清國二十萬分一圖」目録/小林茂，渡辺理絵，山近久美子，鳴海邦匡，藤山友治，小林基

小林茂著・林詠純訳 2019.『外邦圖：帝國日本的亞細亞地圖』光現出版（新北市）, 319p.（小林茂 2011.『外邦図：帝国日本のアジア地図』中公新書 2119 の翻訳繁体字版）

〈ヨーロッパにおける日本近世図〉

小林茂・永用俊彦・鳴海邦匡・臼井公宏・小野寺淳・立石尚之編 2019.『鎖国時代　海を渡った日本図』大阪大学出版会, 91p.

学会発表・講演

小林茂 2018.「埋もれた戦時期地球観測データとその利用：外邦図・空中写真・気象観測資料の探索から」地学クラブ講演（東京地学協会）、2018 年 7 月 20 日.

〈外邦図〉

小林茂 2013～「外邦図：軍事情報から近代資料へ」約 45 分間の放送大学のテレビを通じた特別講義で年に数回放映.

小林茂 2014.「軍事情報から近代資料へ」立命館土曜講座「地図を読む」（立命館大学末川記念会館、2014 年 9 月 27 日）『土曜講座だより』（立命館大学衣笠総合研究機構）456（2014 年 8 月）: 1.

田村俊和 2015.「地形図の凡例における記号の配列：外邦図とその原図および他の複製図を比較して」東北地理学会春期大会（仙台市戦災復興記念館、2015 年 5 月 17 日）『季刊地理学』67(2): 144.

関根良平・山本健太・小林茂 2015.「アメリカの大学図書館が所蔵する外邦図：ハワイ大学およびワシントン大学の状況」東北地理学会春期大会（仙台市戦災復興記念館、2015 年 5 月 17 日）『季刊地理学』67(2): 145.

Tanaka, Azusa and Shigeru Kobayashi 2015. *Gaihozu*, maps of the areas outside the Japanese territory prepared by the former Japanese Army, in the libraries in the United States: Discovery and processing. Beyond the Book: A conference on unique and rare primary sources for East Asian studies collected in North America. （Stanford University, July 1, 2005）.

山本健太（Yamamoto, Kenta）2015.「日本における外邦図デジタルアーカイブの構築と今後の展開」（The establishment and future of the Gaihozu Digital Archive in Japan）EAJRS（日本資料専門家欧州協会［European Association of Japanese Resource Specialists］）conference in Leiden（September 18, 2015）.

関根良平（Sekine, Ryohei）2015.「日本の大学が所蔵する外邦図とその利用」（Gaihozu maps owned by universities in Japan）EAJRS（日本資料専門家欧州協会［European Association of Japanese Resource Specialists］）conference in Leiden（September 18, 2015）.

田中あずさ（Tanaka, Azusa）2015.「ワシントン大学の外邦図コレクション（Imperial Japanese Army Map Collection at University of Washington）」EAJRS（日本資料専門家欧州協会［European Association of Japanese Resource Specialists］）conference in Leiden（September 18, 2015）.

小林茂 2016.「東アジアの近代地図整備と日本陸海軍の地図・海図作製」潜入盗測：外邦測量・村上手帳の研究、全 4 編完結シンポジウム（明治大学駿河台キャンパス、2016 年 2 月 27 日）.

杉山文彦 2016.「近代日中関係から見た外邦測量」潜入盗測：外邦測量・村上手帳の研究、全 4 編完結シンポジウム（明治大学駿河台キャンパス、2016 年 2 月 27 日）.

牛越（李）国昭 2016.「潜入秘密測量と村上千代吉」潜入盗測：外邦測量・村上手帳の研究、全 4 編完結シンポジウム（明治大学駿河台キャンパス、2016 年 2 月 27 日）.

Tanaka, Azusa et al. 2016. *Gaihozu*: Show and Tell. （Suzzallo Library, University of Washington, March 29, 2016）.

田中あずさ・江上敏哲 2016.「北米の外邦図、その発見と整理」図書館史勉強会@関西（京都府立図書館、2016 年 6 月 26 日）.

Miller, Greg in cooperation with Kären Wigen (Stanford), Meiyu Hsieh (Ohio State), Julie Sweetkind-Singer, (Stanford), and Shigeru Kobayashi (Osaka), 2016. Secret Japanese Military Maps Could Open a New Window on Asia's Past. *National Geographic blog All Over the Map.* （https://www.nationalgeographic.com/news/2016/07/world-war-japanese-maps-discovered/）（日本語版は米国で見つかった日本の軍事機密「地図」14 点 ｜ ナショナルジオグラフィック日本版サイト（nikkeibp.co.jp)で閲覧可能）

Kobayashi, Shigeru 2016. Japanese imperial maps: Collections of Gahozu in Japan and in the United States. Noon Lecture of University of Michigan Center for Japanese Studies.（October 27, 2016）（Japanese Imperial Maps: Collections of Gaihozu in Japan and in the United States - YouTube で閲覧可能）

鳴海邦匡・小林茂 2017.「明治初期海図・水路誌の整備過程と対外関係」（第 60 回歴史地理学会大会、愛知教育大学、2017 年 6 月 18 日）『第 60 回歴史地理学会大会発表資料集』59-62.

Kobayashi, Shigeru（小林茂）2018. Databases of images of Japanese imperial maps (Gaihōzu) in Japan.（「外邦図関連の日本国内のデータベース」）, International Workshop: "The portal sites of Japanese old maps".（国際ワークショップ「日本の古地図ポータルサイト」）(Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, March 4, 2018［立命館大学衣笠キャンパス、2018 年 3 月 4 日］)

Means, Setsuko in cooperation with Shigeru Kobayashi 2018. Guided tour of Japanese Cartographic Collection. Geography & Map Division Reading room, Library of Congress, March 23, 2018.

Kobayashi, Shigeru 2019: The gradual reinforcement of Japanese mapping in pre-colonial Taiwan and Korea. T36: The transition to contemporary mappings, International Cartographic Conference, 2019. (Conference Room 1, National Museum of Emerging Science and Innovation [Miraikan], Tokyo, July 16, 2019).

小林護・村上優香・大槻涼 2020「駒澤大学地理学科所藏外邦図のインデックスマップ作成」日本地理学会春期学術大会（ID:P130）（2020 年 3 月駒澤大学で開催予定であったが、新型コロナウイルス流行のため口頭発表は行われなかった）

村上優香・小林護・大槻涼 2020「外邦図を用いたジオリファレンス：バタビア基準外邦図での事例」（ID:P131）（2020 年 3 月駒澤大学で開催予定であったが、新型コロナウイルス流行のため口頭発表は行われなかった）

小林茂 2020.「終戦直前期の多田文男と兵要地理調査研究会」日本地理学会春期学術大会（ID: 129）（2020 年 3 月駒澤大学で開催予定であったが、新型コロナウイルス流行のため口頭発表は行われなかった）

〈気象観測データ〉

小林茂 2017.「第二次世界大戦期の東アジア・東南アジアにおける日本軍・連合国軍の気象観測：データレスキューの視点から」日本地理学会春期学術大会、シンポジウム「データレスキューによるアジアの氣候変動解明」（筑波大学、2017 年 3 月 29 日)『日本地理学会発表要旨集』91: 59.

小林茂 2017.「近代日本の気象観測網の拡大と中国沿岸気象サービス」日本地理学会秋期学術大会（三重大学、2017 年 9 月 29 日）『日本地理学会発表要旨集』92: 121.

Kobayashi, Shigeru 2018. The expansion of Japanese network for meteorological observation in East Asia 1881-1945. The

workshop titled *Instruments, Meteorological Forecasting and Everyday Technology in China, Hong Kong and Japan, 1870-1950* funded by the Collaborative Research Grant Project "Making Modernity in East Asia: Technologies of Everyday Life, 19th -21st Centuries" of the Hong Kong Institute for the Humanities and Social Sciences (The University of Hong Kong, August 27, 2017).

Kobayashi, Shigeru 2018. A study of Japanese network of meteorological observation for the search of wartime data in East Asia. Poster Session of the 11th Annual ACRE (Atmospheric Reconstruction over the Earth) Meeting (Tokyo Metropolitan University, November 15, 2018).

小林茂 2019.「日清・日露戦争期の日本の気象観測網の拡大と電信線」日本地理学会春期学術大会（専修大学、2019 年 3 月 20・21 日）『日本地理学会発表要旨集』95: 249.

〈ヨーロッパにおける日本近世図〉

小林茂・鳴海邦匡 2016.「長久保赤水の日本図と英国海図」人文地理学会大会（京都大学、2016 年 11 月 13 日）『2016 年人文地理学会大会研究発表要旨』112-113.

小林茂・鳴海邦匡 2017.「ロシアと英国の海図に反映された長久保赤水日本図」歴史地理学会第 246 回例会（高萩市文化会館、2017 年 10 月 28 日）『歴史地理学』59(4): 33-34.

Narumi, Kunitada and Kobayashi, Shigeru 2017. The utilization of Japanese early modern maps by Western cartographers during the nineteenth century: A new example. The Regional Symposium of ICA (International Cartographic Association) Commission on the History of Cartography titled *Mapping Asia: Cartographic Encounters between East and West* (Leiden University, September 15, 2017).

Kobayashi, Shigeru 2019. Early modern maps of Japan as sources of Western cartography of East Asia during the 18th and 19th century. Preconference workshop: "Cartography as a Cultural Encounter", International Cartographic Conference, 2019. (Room Uranus, National Museum of Emerging Science and Innovation [Miraikan], Tokyo, July 15, 2019)

鳴海邦匡・小林茂 2020.「近世日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用」日本地理学会春期学術大会（ID: 835）（2020 年 3 月駒澤大学で開催予定であったが、新型コロナウイルス流行のため口頭発表は行われなかった）

(3) 四大学蔵の外邦図の画像の国立公文書館への提供

以上に加えて言及しておきたいのは、「外邦図デジタルアーカイブ」から公開されている外邦図の画像が国立公文書館に提供され、2018 年 11 月以降、同館で公開されるようになった経緯である。現在のところ、外邦図デジタルアーカイブによる画像公開のサービスに並行して、提供された画像が同館に設置されたパソコンで閲覧できる状態になっている。この場合、「外邦図デジタルアーカイブ」が公開していない中国大陸や朝鮮半島の外邦図の画像が、これを通じてみることができるようになったのは大きな変化と言ってよい。今後は「外邦図デジタルアーカイブ」のようにインターネットを通じた公開が国立公文書館から行われることが期待され、それに向けた第一歩が踏み出されたわけである。以下、順を追ってこのような状態に至った経緯の概要を示しておきたい。

外邦図デジタルアーカイブによる大学所蔵の外邦図画像の公開に至る経過は、すでにさまざまな機会で紹介されているとおりである（宮澤仁ほか「外邦図デジタルアーカイブの構築と公開・運用上の諸問題」地図 46(3)[2008]: 1-12）。他方、この公開により外邦図コレクションの存在が広

く知られ、外邦図に対する認識が社会に普及するにつれて閲覧や利用の要請が増大し、関根良平「東北大学における《外邦図デジタルアーカイブ》運用の推移最近の利活用」（外邦図研究ニューズレター11[2014]: 31-41）が報告したように、資料の分類整理や保管あたってきた東北大学の教員ならびにその支援者の負担が増大している。こうした状況が継続すると、この種のサービスを維持が研究者の重荷にと感じられるようになる可能性が大きく、むしろそれは本格的な公開機能を持つ他の機関に移すべきではないか、と関係者が考えるにことになった。もちろんこの場合、「外邦図デジタルアーカイブ」が提供しているサービスのレベルを維持するだけでなく、むしろそれをさらに社会の要請に応じて向上させることが望ましい。

このような認識を受けて、外邦図の画像を引き受け公開できる機関がみつからないか、さまざまな候補を検討し、明治以降戦中期までの外交資料・軍事資料をおもに公開しているアジア歴史資料センターなどに外邦図に関連する刊行物を送付していたところ、同センターより打診があり、関係者に外邦図デジタルアーカイブの説明することとなった。

アジア歴史資料センターは国立公文書館に属している機関で、同館だけでなく、外交史料館や防衛省防衛研究所の収蔵資料のマイクロ画像をインターネットで公開しており、外邦図の画像の公開は、その活動の一環になるのではないかと予想された。

この打診を受けるまでの過程では、日本経済新聞社文化部の松岡資明氏のご配慮をいただいた。同氏は、「国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議」（老川祥一座長）の構成員として活動されるかたわら、公文書の保存に関する著作を公表されており、その中でたびたび外邦図について言及していただいた（『日本の公文書：開かれたアーカイブズ社会システムを支える』ポット出版 2010 年刊、『アーカイブズが社会を変える』平凡社新書、2011 年、『公文書問題と日本の病理』同 2018 年刊、とくに 134-138 頁）。アジア歴史資料センターへの刊行物の送付も、同氏の示唆を得て行ったものである。

最初の説明は 2014 年 1 月 31 日に本郷 3 丁目に近いアジア歴史資料センターに小林茂（当時大阪大）と宮澤仁（お茶の水女子大）が出かけ、平野健一郎センター長、田中福一郎同次長、松尾弘子資料情報専門官はじめ、同センターのスタッフに PPT（タイトル「近代地図のデータベースとしての外邦図デジタルアーカイブ」）を用いて説明した（『外邦図研究ニューズレター』11 号、4 頁も参照）。

そのご日本地理学会春季学術大会（国士舘大学）のおりに、とくに東北大学の関係者に集まっていただき（3 月 27 日）、アジア歴史資料センターへの外邦図の画像データの移管の可能性についてお知らせし、理解を得た。

他方、平野センター長はまもなく 2014 年 4 月に任期満了で退任となり、新センター長の波多野澄雄氏に改めて説明するため、同年 5 月 19 日に小林と宮澤がアジア歴史資料センターでかけ、大幅に改訂した PPT（タイトルは前回に同じ）を使って説明した。

そのご 5 月 26 日には京都の地球環境学研究所に小林が出かけ、旧知の安成哲三所長に外邦図デジタルアーカイブについて説明した。同研究所も外邦図の画像を受け入れる可能性のある機関と考えたからである。また別の機会に、山本健太（國學院大）が同研究所のシステム担当教員、関野樹准教授に外邦図デジタルアーカイブについて説明した。

そのご 10 月 8 日になって、アジア歴史資料センターの大野太幹から、波多野センター長と国立公文書館の齊藤敦理事の会談の結果を伝えるメールがあり、他方東北大学地理学教室が 11 月はじめに外邦図デジタルアーカイブの移管をみとめる方向にふみきる意思決定を行ったこともあって、何度かメールを通じて意見が交換され、12

月 19 日にアジア歴史資料センターでそれに向けた協議が行われることになった。

国立公文書館総務課からは泉総子課長補佐、業務課の筧雅貴受入管理係長、アジア歴史資料センターから波多野センター長のほか3名の研究員が、大学側は東北大学の磯田弦・関根良平、さらに宮澤仁・小林茂が出席した。そこで得られたのは、「外邦図デジタルアーカイブ」をそのまま移管するという考え方には無理が多く、むしろ外邦図の画像とそのメタデータを寄贈あるいは寄託する方が現実的という結論であった。「外邦図デジタルアーカイブ」のシステムはアマチュアの大学関係者がフリーのソフトを組み合わせて構築したもので、公的機関による本格的公開には適しておらず、国立公文書館やアジア歴史資料センターのシステムに合わせた再構築が必要と考えられたからである。さらに東北大学が重複して保有している外邦図についても話題がおよんだ。

ただしその頃は、国立公文書館の機能拡充に向けて検討が行われており、協議の機会はなかなかやってこなかった。今から考えれば、上記の「国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議」の議論が進められており、その基本的な方向が確定していなかったからと考えられる。

国立公文書館との協議は、2016 年 2 月 15 日に国立公文書館で行われた。まず同館の齊藤毅理事に挨拶したあと、五十嵐久留美総務課課長補佐・寺澤正直企画法規係長との協議となった。八日市谷哲生業務電子情報第一係長も同席したか。大学側からは、前回のメーバーに加え、外邦図デジタルアーカイブの技術的改善を担当してきた山本健太も参加し、電子データの受け渡しなどについて議論を開始した。外邦図の画像データだけでなく、その書誌データを中心とするメタデータの受け渡しが不可欠であるというようなところから議論が始まった。ともあれ、国立公文書館では、デジタル・データの受入は初めてのことで、法律的な側面でも検討が必要なことがわかったが、以後の議論は東北大の磯田が窓口になり、協議を進めることになった。

この国立公文書館での協議の直後には、「国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議」が作製した「国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する基本構想（案）」が公表され、その中には「デジタル化の進展や公文書の利用に対するニーズの多様化という世界的な潮流もふまえた上で、我が国の国立公文書館の機能・施設の在り方を今改めて検討する必要がある」（2 頁）、「国立公文書館には、・・・例えば、歴史公文書等の収集・情報提供、保存・修復、デジタルアーカイブ化や人材育成等の取組において、センター的機能を発揮することが期待される」（6 頁）、「・・・海外を含めた様々な機関・施設が既に所蔵している歴史公文書等については、国立公文書館に全てを集約することは現実的ではないため、デジタル複製の入手という形で集約を図りつつ、国民の主体的な利用に供するよう、その所在情報を横断的に集約し、提供していくことが重要である」（9 頁）と、外邦図の画像データを受け入れて公表するような場合も想定されている。

以後、協議が続けられて、外邦図の画像とメタデータの受け渡しを経て、上記のように国立公文書館で外邦図の画像の公開が行われるようになったわけである。デジタル・データの受け渡しは、外邦図が初めてのケースということなので、このプロセスについて記録を残しておく必要があると考えられ、差し支えのない範囲で、その経過と手続きの報告も必要と考えられる。

このような協議にたずさわり、また初期の意図がある程度実現してあらためて気づいたのは、外邦図には学術資料という役割もあるが、同時に日本陸海軍が作製した公文書でもあるという点である。かつては軍事秘密であったが、その軍事的な意義がなくなった現在、公文書としての扱いを受けるのは、その保存や利用という点からしても望ましく、そうした観点からさらに外邦図について認識を深めるべきであろう。　（小林茂　記）